

長野県埋蔵文化財センター年報17

2000

財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター



長峯遺跡全景（北上空より）



箕輪遺跡 A 低地古代水田跡

序

高速道路関連事業などが一応の区切りとなった本年度から、当センターは長野県内全域に渡っての埋蔵文化財発掘調査事業に対応するという姿に衣替えを致しました。国営公園関連、高規格道路関連、国道バイパス関連、県営圃場整備関連、県道改良関連、農道整備関連など、多様な公共事業に対応した調査を実施しましたが、これらの事業は県内各地に分散しており、当センターも全県的な対応の実績を積み上げて参りました。また、市町村等の埋蔵文化財調査に対する調査研究員の派遣や、出土遺物の保存処理なども実施しており、名実とも長野県の埋蔵文化財センターとしての役割を果たすことになりました。

当センターに対するもう一つの期待は、普及・公開活動であります。本年度も長野県立歴史館や長野県民文化会館を会場とした企画展だけでなく、県内各地に会場を借り、市町村教育委員会の調査資料も含めた展示会をいくつか実施しました。講演会の開催なども含め、県民に親しまれる普及活動にも力を注ぐ所存です。

本書は平成12年度に当センターが実施した事業の概要をまとめたものです。ご参考となれば望外の喜びです。

日頃より当センターの事業にご協力・ご指導いただいている関係各位にお礼申し上げますとともに、一層のご支援をお願いする次第です。

平成13年3月

長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間 鉄四郎

目次

口絵写真

長峯遺跡全景（北上空より）（上）

箕輪遺跡A低地古代水田跡（下）

序

目次

I 発掘調査及び整理作業の概要	1	11 竹佐中原遺跡	23
1 仲町遺跡	3	12 石子原遺跡	24
2 川久保遺跡	5	13 駒込遺跡	27
3 八幡遺跡群	6	14 香坂山遺跡ほか	28
4 上五明条里水田址	8	II 普及・公開活動の概要	
5 矢出川遺跡群	8	1 現地説明会	29
6 山の神遺跡ほか	9	2 展示会等	30
7 長峯遺跡	11	3 指導・研究会・学習会	32
8 馬捨場遺跡	15	4 刊行物	32
9 箕輪遺跡	17	III 機構・事業の概要	
10 川路大明神原遺跡	21	1 機構	33
		2 事業	33
		平成12年度役員及び職員	37

I 発掘調査及び整理作業の概要

平成12年度の発掘調査は、担い手育成基盤整備事業関連・畑地帯総合整備事業関連・広域営農団地農道整備事業関連・国営公園関連・高規格道路関連・国道バイパス関連・緊急地方道整備事業関連の諸遺跡を対象とした。整理作業は上信越自動車道関連・農道整備事業関連遺跡を対象とした。概要を以下の一覧表に示す。

(1) 発掘調査

発掘調査のうち12遺跡は記録保存の本格調査、4遺跡は確認調査である。記録保存調査のうち仲町遺跡、川久保遺跡、上五明条里水田址、山の神遺跡、長峯遺跡、川路大明神原遺跡が先年来の継続調査、それ以外は新規の遺跡である。山の神遺跡は4年越し、川久保遺跡・上五明条里水田址・長峯遺跡は2年越しの記録保存を終了させた。山の神遺跡検出の日本最古の列石遺構は現状のまま保存し、今後活用方法を検討することとなった。長峯遺跡は大苦戦の末、大規模な縄文集落を完掘した。大規模遺跡である仲町遺跡と川路大明神原遺跡は終了を次年度に持ち越したが、いずれもほぼ予想通りの内容で、全体像をほぼ把握するまでに至った。古くから著名な箕輪遺跡はついに水田跡を検出し、学界の期待に応える内容となった。馬捨場遺跡は旧石器時代のブロックが発見されるなど予想外の成果を収めた。八幡遺跡群や竹佐中原遺跡は大規模だが、本年度は遺跡の中心部分を把握できないまま終わり、石子原遺跡は縄文時代～古墳時代の良好な資料は得られたものの、期待された前期旧石器時代の遺構・遺物は発見されなかった。いずれも次年度以降に期待がかかる。

確認調査のうち矢出川遺跡群は遺構・遺物が認められず、本年度工事着工区域の現道路敷の掘削には立ち会い調査を実施したが、やはり遺構・遺物は発見されなかった。窪平遺跡ほかアルプスあづみの公園関連の確認調査も、遺構・遺物は発見されなかった。

(2) 整理作業

上信越自動車道関連の香坂山遺跡と県単農道関連の駒込遺跡の整理作業は、印刷・刊行まで完了した。

[発掘調査]

国道18号野尻バイパス関連

所在地	遺跡名	調査対象面積 m ²	契面 面積 m ²	約積 面積 m ²	調査 面積 m ²	調査延 面積 m ²	調査期間	調査 員数	調査 状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以 降調査面 積 m ²
信濃町	仲町	16,960	10,500	2	19,300	12/4/27 ~12/12/1	8	継続	旧石器時代ブロック 平安時代~近世集落	ナイフ形石器等 縄文創草期土器	5,100	
	川久保	6,500	500	1	500	12/5/17 ~12/6/30	2	終了	中世建物	縄文創草期~早期土 器、古墳時代土器	0	

国道18号更埴一坂城バイパス関連

更埴市	八幡	50,000 以上	6,000	1	6,000	12/6/14 ~12/12/26	2	継続	古墳時代集落 平安時代建物跡	古墳時代土器 木製農具	未定
-----	----	--------------	-------	---	-------	----------------------	---	----	-------------------	----------------	----

緊急地方道整備関連

坂城町	上五明	500	350	2	700	12/7/23 ~12/10/14	2	終了	近世水田、土坑、 焼土跡	中・近世陶磁器	0
-----	-----	-----	-----	---	-----	----------------------	---	----	-----------------	---------	---

農道整備事業関連

南牧村	矢出川	未定	24	1	24	12/11/23 ~12/12/8	3	継続	なし 試掘調査と工事立会	なし	未定
-----	-----	----	----	---	----	----------------------	---	----	-----------------	----	----

国営アルプスあつみの公園関連

大町市	山の神	40,000	2,000	2	2,500	12/4/25 ~12/9/1	2	終了	縄文早期集落	縄文早期土器・石器	0
	菅ノ沢	1,204	1,204	1	1,204	12/5/18 ~12/8/23	2	終了	弥生時代土坑	縄文時代土器・石器 弥生時代土器	0
	窪平 ほか	未定	196	1	196	12/6/29 ~12/11/16	1	継続	なし 試掘調査	なし	未定

担い手育成基盤整備事業関連

茅野市	長峯	32,000	15,510	1	15,510	12/3/10 ~13/1/12	3	終了	縄文中期環状集落	縄文土器・石器、 土偶、翡翠製垂飾等	0
-----	----	--------	--------	---	--------	---------------------	---	----	----------	-----------------------	---

広域営農団地農道整備関連

茅野市	馬捨場	10,500	8,500	2	10,500	12/5/8 ~8/25	3	継続	旧石器時代ブロック 縄文中期集落	尖頭器、ナイフ形石 器、縄文中期土器、 石器	2,000
-----	-----	--------	-------	---	--------	-----------------	---	----	---------------------	------------------------------	-------

国道153号伊那バイパス関連

箕輪町	箕輪	36,000	13,000	3	14,500	12/10/10 ~13/2/28	5	継続	古墳時代~近代 水田跡、弥生~古墳 時代集落	弥生土器、古墳時代 土器、磨製石斧、杭 農具	23,000
-----	----	--------	--------	---	--------	----------------------	---	----	------------------------------	------------------------------	--------

一般国道474号飯喬道路関連

飯田市	大明神原	75,000	25,940	1	25,940	12/4/17 ~12/12/23	3	継続	縄文中期集落 陥穴、土坑	縄文土器、土偶 石器等	25,000
	竹佐中原	未定	4,860	1	4,860	12/11/30 ~12/12/8	1	継続	縄文時代土坑	縄文土器、打製石斧	未定
	石子原	未定	15,000	2	20,000	12/5/15 ~12/10/20	2	継続	旧石器時代ブロック 縄文早期集落、古墳	ナイフ形石器、縄文 土器、特殊磨石、古 墳時代土器	未定

[整理作業]

事業別	所在地	遺跡名	作業内容
県単農道整備 上信越自動車道	浅科村 佐久市	駒込 香坂山	報告書刊行 接合・実測・図版作成、報告書刊行

なかまち
1 仲町遺跡 (国道18号野尻バイパス関連)

所在地：上水内郡信濃町大字野尻字上ノ原549-1他
調査担当者：田中正治郎 西山克己 白田広之 市川隆之
鶴田典昭 伊藤友久 中島英子 山崎まゆみ

調査期間：平成12年4月27日～12月1日

調査面積：10,500㎡、延べ19,300㎡

遺跡の立地：丘陵上の平坦面及び低地に向かう斜面部。

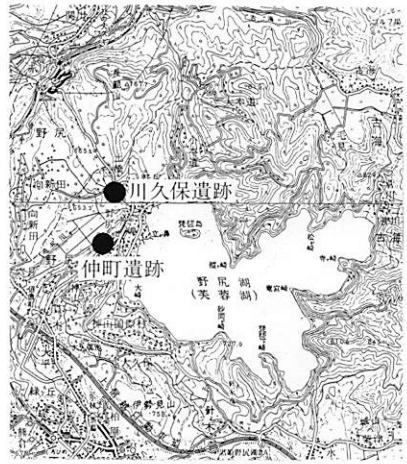
検出遺構：旧石器時代のブロック・礫群・炭化物集中。
縄文時代の落とし穴。平安時代の竪穴住居跡、
中世・近世の道跡、掘立柱建物跡他。

出土遺物：旧石器時代・縄文時代草創期を中心とした
石器群。縄文時代草創期～晩期、弥生時代
中期、古墳時代～近世の土器・陶磁器類。

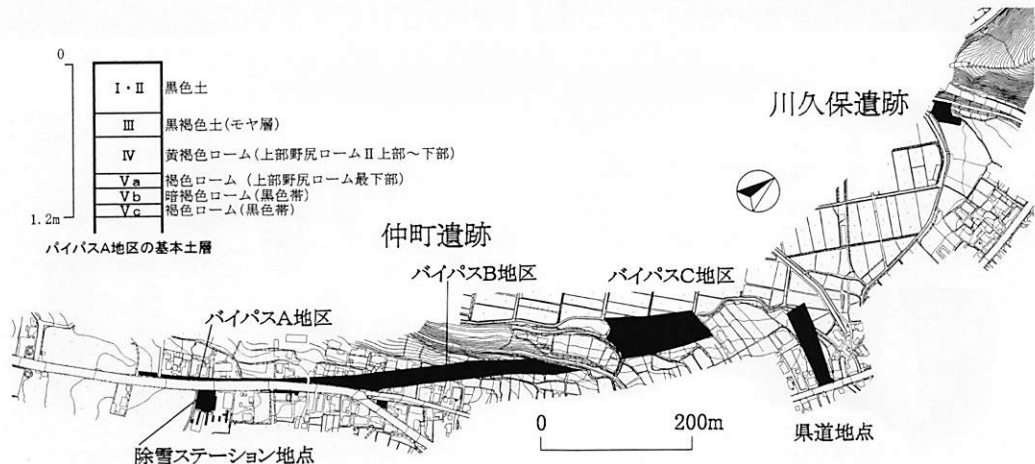
調査の概要：国道18号野尻バイパス、県道、及び除雪ステーションの建設に伴う調査で、それぞれバイパス地点、県道地点、除雪ステーション地点と仮称する。また、バイパス地点は長野県埋蔵文化財センターが担当する地区と、信濃町教育委員会が担当する地区とに区分され、当センターの調査区はA、B、Cの3地区に区分して調査を実施した(第2図)。

旧石器時代：丘陵上の平坦部(除雪ステーション・バイパスAB地区)で遺物集中区が多数検出され、石器・剥片類などが約19,000点出土した(第3図)。礫群の多くはIV層に検出されたが、Vb層上面ではSH310など、小円礫を配置したような出土状況を示すものが数例確認された(第4図)。また、C地区の斜面部より石刃を多数含む石器群が確認された(第5・7図)。

縄文時代：C地区で草創期の遺物がまとめて出土した。未整理であるが、上層に爪形文土



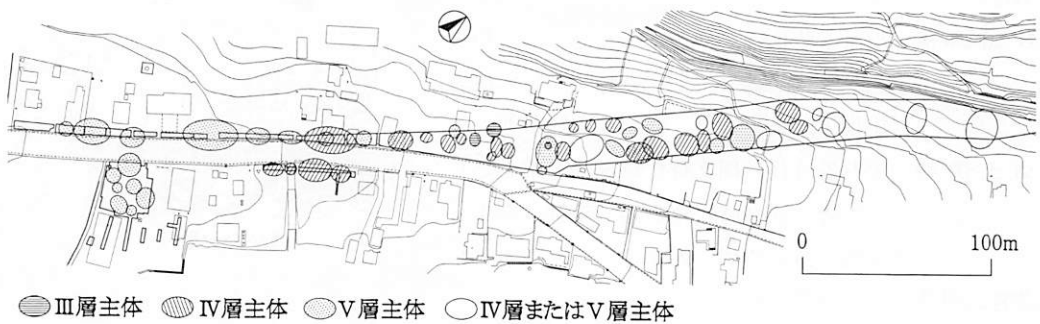
第1図 遺跡の位置 (1:100,000)



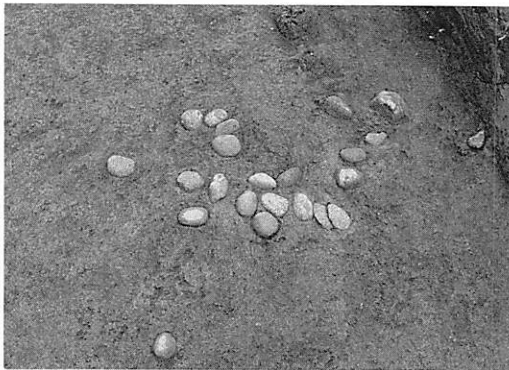
第2図 仲町遺跡平成12年度調査区

器、下層（砂礫層）に円孔文土器・隆起線文土器・無文土器が出土し、それに伴う石器群が認められる（第6図）。なお、下層の砂礫層は野尻湖発掘調査団のカツレキ層に当たる。また、県道地点の流路内の砂礫層より、縄文時代後期・晩期の遺物が多数出土し、その上層では、弥生時代中期、古墳時代前期から平安時代におわたる遺物包含層が形成されている。

平安時代：仲町遺跡周辺は東山道の沼辺駅の推定地とされ、8世紀末から9世紀初頭の竪穴住居跡が7棟調査されており、複数の住居跡より「十」の墨書・刻書土器が出土した。古代では、信濃町内最古期の集落であり、沼辺駅との関連が注目される。



第3図 旧石器時代遺物集中区概念図（調査時点の認識）



第4図 バイパスB地区SH310（V層上面）



第5図 バイパスC地区SQ07（IV層）



第6図 バイパスC地区カツレキ層出土遺物



第7図 バイパスC地区SQ07の石器

中世・近世：バイパスA・B地区で道跡と思われる硬化面が複数検出されたが、遺構に伴う遺物が少なく、時期判定が困難である。遺跡内を北国街道が通過しており、仲町周辺は中世以来交通の要衝であったといわれている。道跡の中には、底面が硬化した溝状の遺構があり、これらは中世にさかのぼる可能性がある。また、県道地点は近世北国街道の野尻宿にあたり、中世・近世の掘立柱建物跡・井戸跡などの遺構群が検出され、多数の古銭・陶磁器などの遺物が出土した。また、火災の痕跡と考えられる炭化物層が部分的に検出されており、嘉永元年（1848）などの大火との関係を検討する必要がある。



第8図 県道地点掘立柱建物跡群（中世以降）

2 ^{かわくぼ}川久保遺跡（国道18号野尻バイパス関連）

所在地：上水内郡信濃町大字野尻917-1ほか 調査担当者：西山克己 白田広之

調査期間：平成12年5月17日～6月30日

調査面積：500㎡

遺跡の立地：丘陵斜面～氾濫原性低地

時代と時期：縄文時代草創期～古墳時代

遺跡の特徴：土器集中地点

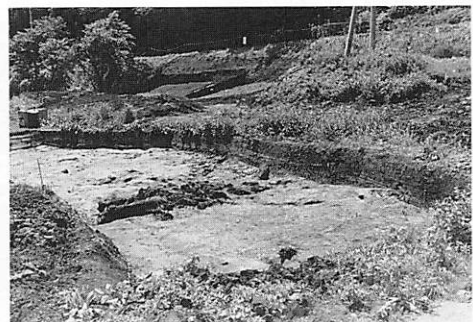
主な検出遺構：土器集中

主な出土遺物：縄文時代早期の土器・石器、古墳時代前期～中期の土器

今年度のバイパス工事の設計変更により、急きょ500㎡の調査を行うこととなった。調査位置は昨年度調査区北端の西隣りにあたる。

今回の調査では、昨年度の調査成果より、古墳時代の特に4世紀後半から6世紀前半を中心とする土器の出土が予想された。しかし、昨年度同様の丘陵斜面と氾濫原性低地の調査であったが、丘陵斜面からは縄文時代早期から草創期の遺物のみが出土し、昨年度の丘陵斜面での調査とは異なった結果となった。これらの遺物は北側丘陵にある同時期の遺跡からの転落遺物であると考えられる。

氾濫原性低地は、昨年度とは異なり比較的安定していた地域ようである。遺物は昨年度同様に4世紀後半から6世紀前半にかけての土器が多量に出土した。また、中世の1軒×2軒の掘立柱建物跡が確認された。



第9図 川久保遺跡遠景

3 やわた 八幡遺跡群（国道18号坂城・更埴バイパス関連）

所在地：更埴市八幡字中道1950番地の1ほか
調査期間：平成12年6月14日～12月26日まで
調査面積：試掘対象面積5,000㎡、本調査6,000㎡
遺跡の立地：佐野川扇状地

調査担当者：町田勝則
上田典男

中心となる時代：古墳時代後期～平安時代

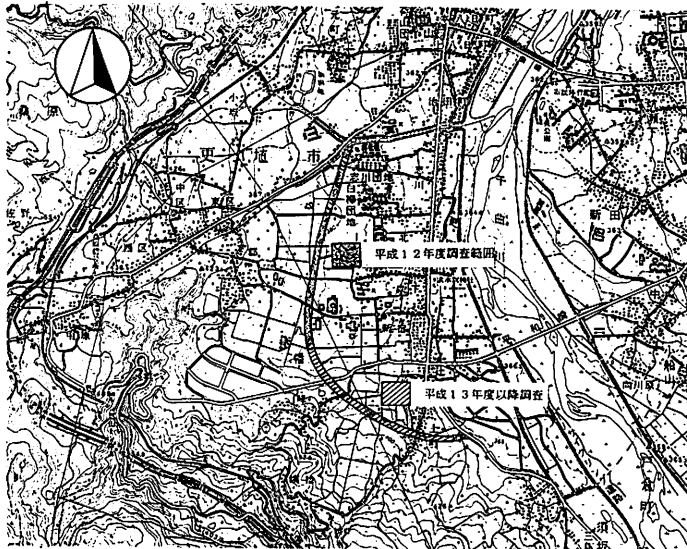
遺跡の特徴：扇状地の形成に関わったと考えられる旧流路と、微高地部に位置する遺跡。

主な検出遺構：埋没流路（旧流路）8本、溝址6本、竪穴式住居址13軒、掘立柱建物址11棟、土坑79基など。

主な出土遺物：墨書土器、木製田下駄、馬銜、木製椀など

調査の概要：バイパス予定地は、八幡遺跡群（遺跡番号85）指定地にあたり、群内の登録遺跡は4つある。北から外く祢（85-8）、北稲付（85-15）、中道（85-3）、社宮司（85-16）の各遺跡である。

12年度は遺跡群全体の試掘調査を進め、合わせて北稲付ほかの登録遺跡を面調査した。



第10図 八幡遺跡群位置図（1：50,000）



第11図 調査地区名

試掘の結果、八幡遺跡群は佐野川によって形成された扇状地の起伏、具体的には埋没流路と微高地部によって構成された立地条件をとり、集落遺跡は特にその微高地部にて確認できた。北稲付、大道の地籍がそれで、北稲付では湿地に隣接して4棟の掘立柱建物址を検出し、大道地籍では13軒の竪穴式住居址と7棟の掘立柱建物址を確認した。北稲付は1983年に更埴市で調査した地籍に隣接しており、調査状況から判断して、同一遺跡の可能性が高い。出土遺物には恵まれなかったが、市調査分から推定して、平安時代に属する遺構の可能性が高い。大道は未周知の遺跡であったが、今回の調査で古墳時代後期頃の集落遺跡であることが確認できた。南北に埋没流路と湿地帯が広がり、竪穴式住居と掘立柱建物を整然と配置した様は、当該期のムラの在り方を考えていく上に、良好な資料を提供できたものと考えている。

また登録遺跡であった外く衾遺跡、中道遺跡は、ともに埋没流路上にあって、流下物と考えられる遺物以外に、生活痕跡は確認できなかった。したがって今回の調査範囲では、それらを遺跡地として認定する根拠は得られなかった。

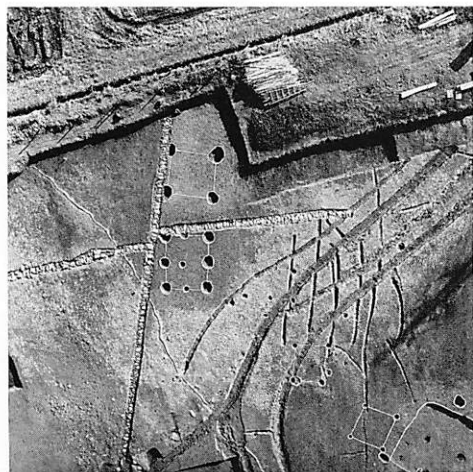
文献

1984年、更埴市教育委員会

「長野県更埴市八幡遺跡群 北稲付遺跡」



第12図 中道遺跡の調査



第13図 大道遺跡（市道北）の掘立柱建物址



第14図 大道遺跡（市道南）の竪穴式住居址

4 ^{かみ ごみょうじょうり すいでん し} 上五明 条里水田址 (県道整備事業関連)

所在地：埴科郡坂城町大字上五明字旅屋場651他

調査担当者：桜井秀雄・宇賀神誠司

調査期間：平成12年7月23日～10月14日

調査面積：350㎡ (のべ700㎡)

遺跡の立地：千曲川左岸の沖積地

遺跡の特徴：近世以降の水田跡

検出遺構：土坑2、焼土跡1、水田面2

出土遺物：中・近世陶磁器



第15図 上五明条里水田址位置図 (1 : 100,000)

調査の概要：今回は平成9年度に実施した前回調査に引き続くものであり、調査地点は前回の西側に位置し、遺跡の最西端にあたる。遺跡は千曲川左岸の沖積地西縁に広がる平安時代～近世にかけての条里水田址とされているが、前回調査では平安時代の集落が検出され、新たな知見が得られている。調査は2面にわたり実施した。断面観察により2層の水田面が確認できた

が、面的なひろがり、第1調査面において上層水田面のわずかな痕跡と下層水田面の畦畔の一部が検出されたにとどまる。他には焼土跡1基が認められた。第2調査面では土坑2基の他、自然流路1基が検出されたのみである。いずれも近世以降の所産と考えられよう。第2調査面以下については部分的に重機による深掘りトレンチをいれたが、遺構・遺物はともに全く認められなかった。



第16図 全景風景 (第1調査面)

5 ^{やでがわ} 矢出川遺跡群 (畑地帯総合整備事業関連)

所在地：南佐久郡南牧村大字野辺山401-1ほか

調査担当者：川崎 保・田中正治郎・百瀬長秀

調査期間：平成12年12月6日～8日 (試掘)

11月23日～30日 (工事立会)

調査面積：12地点・24㎡ (試掘)

遺跡の立地：千曲川の支流、西川左岸の八ヶ岳山麓、野辺山高原の東南端

調査の概要：遺構、遺物ともに検出されなかった。



第17図 矢出川遺跡群位置図 (1 : 100,000)

6 やま かみ
山の神遺跡ほか（国営アルプスあづみの公園関連）

所在地：大町市常盤字山の神7992ほか
調査担当者：川崎 保、桜井秀雄
調査期間：平成12年4月25日～9月1日
調査面積：表面積2000㎡、のべ2500㎡
遺跡の立地：高瀬川支流の乳川の左岸、神明原扇状地扇央部

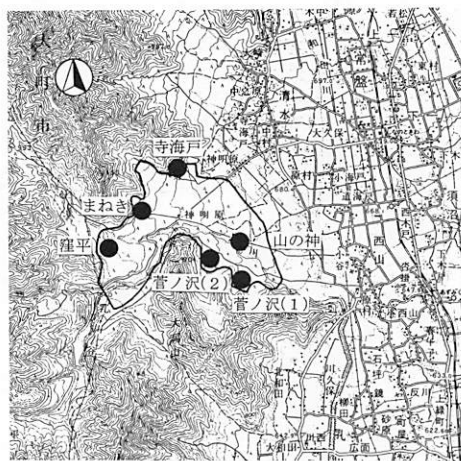
検出遺構：縄文時代早期竪穴住居跡1（12）、土坑22（143）、集石・配石遺構6（72）（方形区画石列含）、焼土集中20（45）（ ）内はのべ

出土遺物：縄文土器（押型文、貝殻条痕文など）、石器（石鏃、スクレイパー、石錐、特殊磨石、台石など）

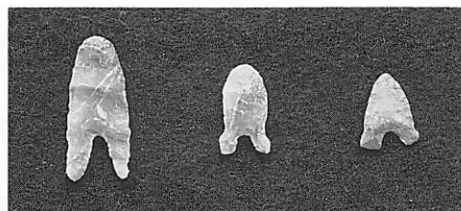
調査の概要：山の神遺跡の基本土層は上位から順にI層（表土）、II層、III a、III b、IV a、IV b層、V層、VI層、巨礫層となる。II、III a、IV a層（黒褐色砂質シルト）の土壌化が著しく、遺物を多く含む。III b、IV b層（黄褐色シルト質砂）は土石流による層で遺物は少ない。V層、VI層（黄褐色粗砂）も扇状地形成後に乳川が押し出した土石流によって形成されたものである。巨礫層は神明原扇状地を形成する花崗岩で、径30cmから2mくらいのものまでを含んでいる。

土層からは扇状地が形成されたあとも、乳川の水位が高かったため容易に土石流が発生し、土石流が帯状に堆積した部分に山の神遺跡が形成されている。縄文時代早期になると乳川の水位は下がり、土石流の規模は徐々に小さくなっている。III a層形成後は乳川自身の浸食などでさらに水位が下がり、遺跡自体が土石流で覆われることがなくなったと理解される。

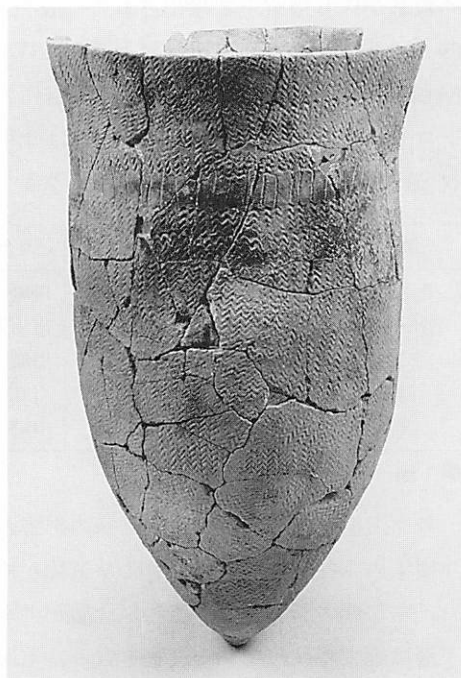
早期には伐採用の大型磨製石斧が存在しないことや竪穴住居跡群の外縁に風倒木痕が多数残っていることを考えると、人為的に森を拓いて集落を



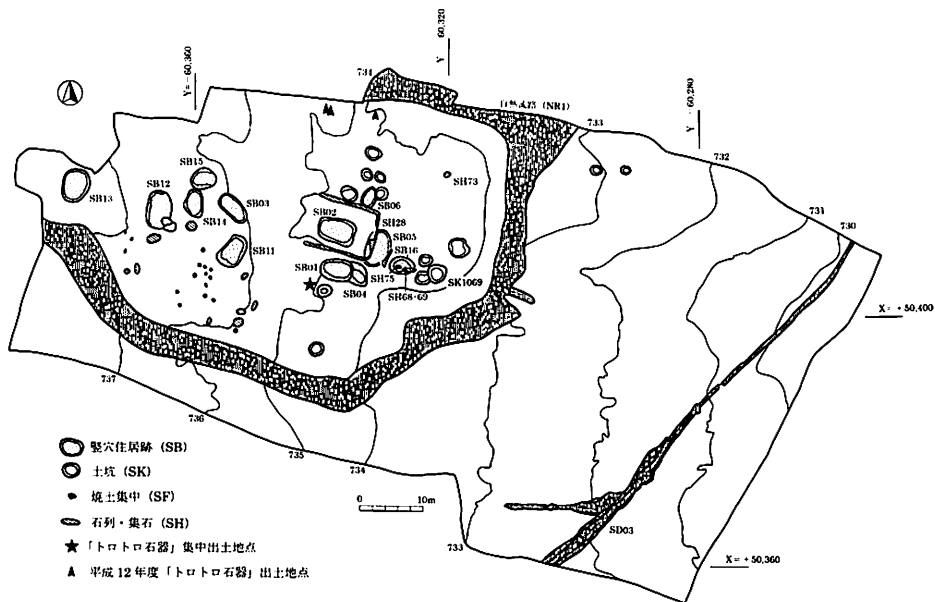
第18図 山の神遺跡ほか（1/10,000）



第19図 山の神遺跡出土「トロトロ石器」



第20図 山の神遺跡出土押型文土器



第21図 山の神遺跡全体図 (1/1,200)

形成したというよりは、土石流によって森の一部が帯状に開け、そこに集落を営みはじめたのであろう。

遺構では径・深さともに2mを超えるこの時期としては超大型の円形の土坑SK1069をはじめ数基がIVb層直上で検出された。またSH28(コ字状区画石列)の南辺の延長上にSH68・69・75といった石列がIIIb層下面からIVb層直上で検出された。竪穴住居跡SB16の主軸の方向もこの石列にそっている。コ字状石列およびその規格が永続的なものであったことが伺える。トトロ石器(異形部分磨製石器)は今年度3点(第19図)出土し、計41点となった。林道関係:林道関係は(第1表)のような工程で、試掘調査と面的な調査をおこなった。

遺跡名	所在地	調査担当者	調査期間	林道名称	調査面積(地点)
菅ノ沢(1)	大町市常盤8018-2ほか	川崎・桜井	5/18~6/5	乳川林道	304m ²
菅ノ沢(2)	大町市常盤7949-2ほか	市川隆之	8/21~23	乳川林道	900m ²
まねき	大町市常盤7836-5ほか	川崎	6/29~7/6	大洞林道(1)	44m ² (11)
寺海戸	大町市常盤7793-1ほか	川崎	6/30~7/6	大洞林道(2)	68m ² (17)
窪平	大町市常盤7871ほか	川崎	11/13~16	常盤林道	84m ² (21)

第1表 林道関係遺跡調査一覧

菅ノ沢遺跡は、猛禽類の営巣への影響の有無で調査工程上(1)と(2)に区分した。(1)地区は、昨年度末の試掘調査で、遺構および遺物が検出されたので、面的な調査が必要であると認められた。本年度の調査では、遺物包含層が洪水砂によって、上下2層に区分されることが判明した。下層は縄文時代後晩期の遺物を含み、上層は弥生時代後期の遺物や遺構があることが確認された。(2)地区、まねき遺跡、寺海戸遺跡、窪平遺跡では遺構・遺物は確認できなかった。

7 ^{ながみね}長峯遺跡（県営圃場整備事業関連）

所在地：茅野市北山8385ほか

調査担当者：柳澤亮・寺内隆夫

調査期間：平成12年3月10日～13年1月12日

西香子

調査面積：15,510㎡ 調査総面積：36,750㎡（11・12年度合計）

遺跡の立地：八ヶ岳の裾野、角名川に沿う東西に長い細尾根状の台地上部と、その南側の沢に面する斜面。標高1,054～1,073m。同じ台地の西側下流に聖石遺跡が隣接。

遺跡の特徴：縄文時代中期～後期の集落

検出遺構（調査終了時点）

遺構名	数 (総数)	備考
竪穴住居跡	141 (225)	縄文時代中期 219 " 後期 6
掘立柱建物跡	約10 (約20)	縄文時代中期 約18 " 後期 2
土坑	約2,400 (約3,300)	貯蔵穴、墓壇、柱穴 ほか
焼土跡	3 (12)	住居の炉か
埋設土器	8 (10)	屋外埋設土器
集石跡	6 (6)	黒曜石の剥片集中 (石器製作跡か)ほか

出土遺物

土器：縄文時代中期・後期土器

石器：石鏃、両頭石器、刃器、石錐、石匙、
打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、石
皿、台石

土製品：土偶、耳飾、土鈴、土製円盤

石製品：垂飾（ヒスイ、滑石その他）

丸石、石棒

その他：黒曜石の原石

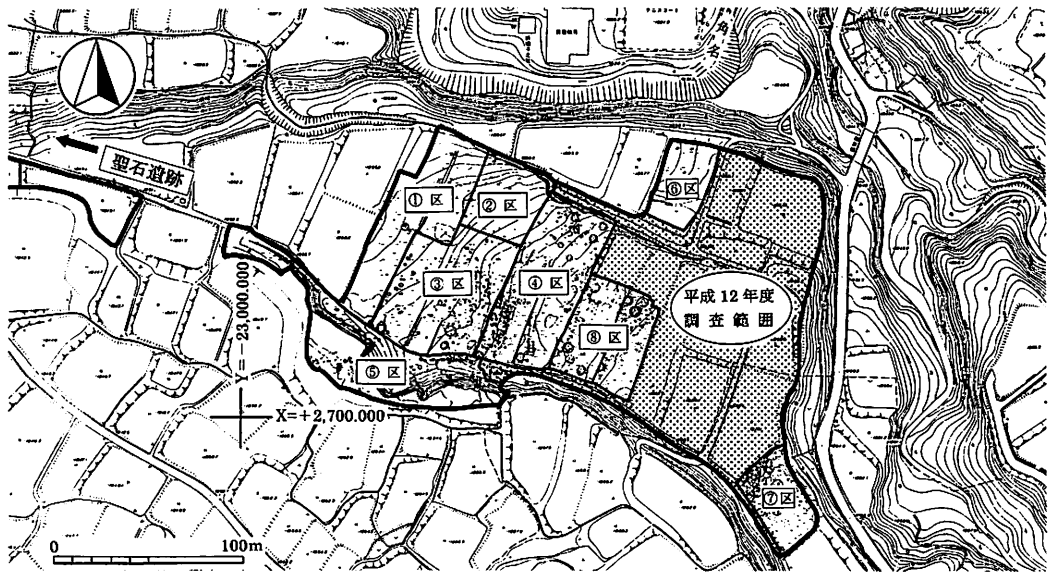
調査の経過 芹ヶ沢地区圃場整備事業にかかる当センターの調査は平成10年聖石遺跡に始まり、11・12年長峯遺跡の3年間で終了した。この調査ではどちらの遺跡もほぼ遺跡全体が対象となり、調査総面積は50,000㎡を超える。その結果、昭和30年代の開田工事による削平の影響はあるものの、聖石遺跡・長峯遺跡ともに縄文時代中後期の集落遺跡として良好な資料となる調査成果を得ている。



第22図 長峯遺跡位置図（1：100,000）



長峯 ながみね：縄文時代中期初頭～後期前半の集落
聖石 ひじりいし：縄文時代中期後半～後期前半の集落
別田沢 べったざわ：縄文時代中期後半～後期前半の集落
第23図 周辺遺跡の位置（1：12,000）



第24図 調査範囲図 (1:4,000)

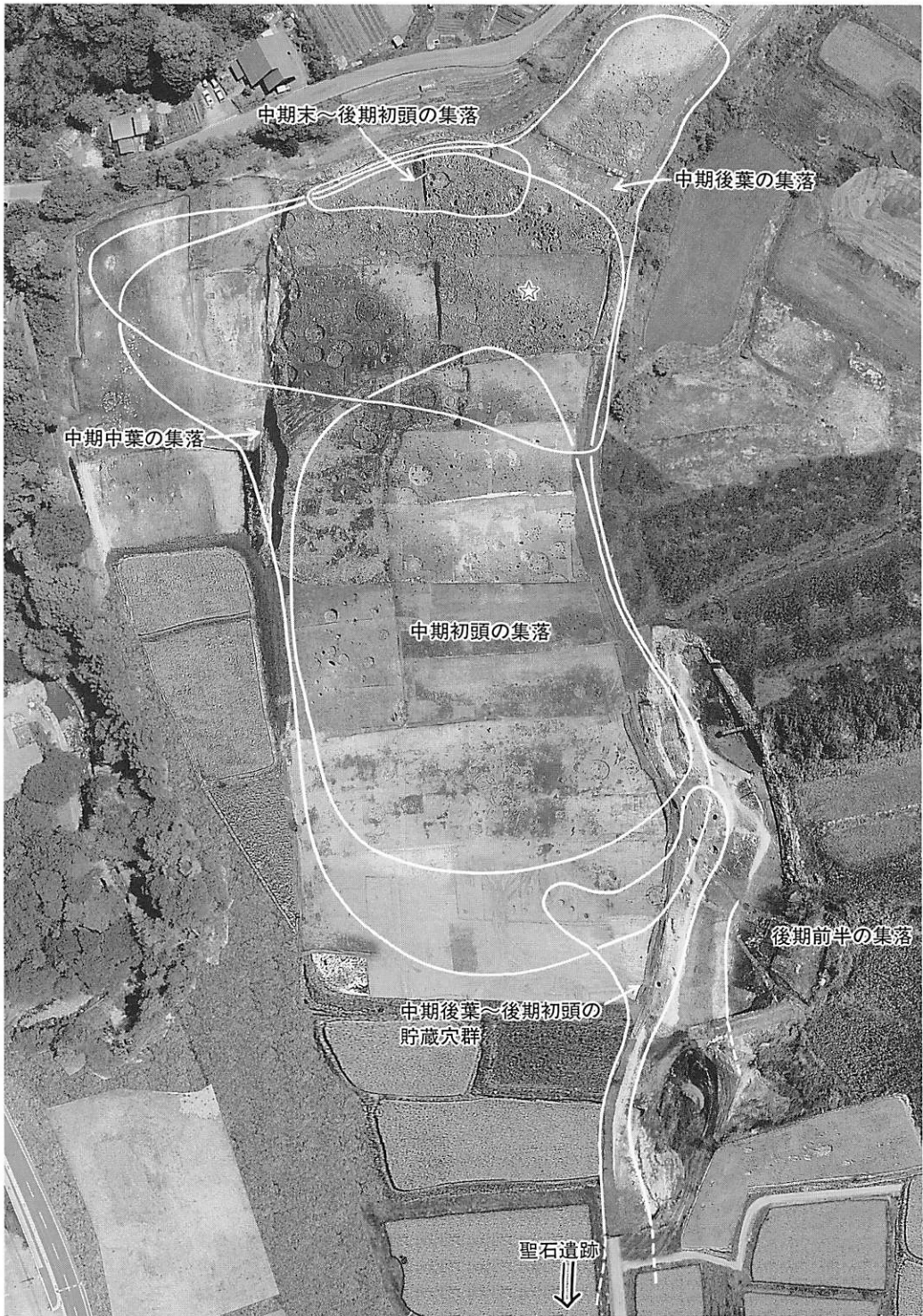
ここでは2ヵ年分の調査成果について概要を報告する。最終的な成果は整理作業を経た調査報告書に記す。

台地の形成 11年に調査が終了した地区は本工事による掘削が進み、12年の調査時には台地を南北に横断する高さ5mの地層露頭面が観察できたため、6月に理学博士河内晋平氏による地質指導を受けた。その結果、縄文時代の遺構調査面は厚さ1～2mの降灰ローム層上面に位置し、ローム層下位には火砕流堆積物が厚く堆積している状況が分かる。この火砕流は後期更新世の八ヶ岳の火山活動によるものと考えられる。なお火砕流堆積物には泥炭層があり、そこから良好な炭化木の採集ができています。今後、試料の樹種鑑定と年代測定を試みたい。

遺構の分布 (第25図) 台地は現在水田と畑地に利用されている。今回の調査により、台地上には縄文時代中期初頭から後期初頭までの遺構が分布することが明らかになっている。また台地の南斜面(台地より比高差5m)の一部には後期前半の遺構がまとまっている。遺構時期は陥し穴と馬の墓壙を除くと、すべて縄文時代中後期に限定される特徴がある。包含層出土の遺物も遺構時期に合致する。次に縄文時代各期の様相を記す。

中期初頭 長峯遺跡で初めて住居が作られ、集落が形成される時期である。遺跡中央の台地縁辺に沿うような位置に数軒の住居跡がある。住居跡はやや小形の略円形をして埋壔炉を持つ。壁の立ちあがりには不明瞭なタイプが多い。住居跡周辺には貯蔵穴と考えられる土坑がまとまる。全体の遺構分布は一つの環状とも、南北の台地縁辺に分かれる二つの弧状とも見られる。

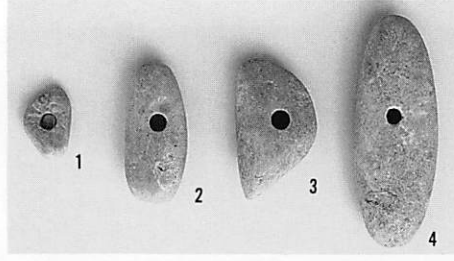
中期中葉 遺構分布は中期初頭と重なりつつ東西に拡大している。遺構数も増大し、住居跡や貯蔵穴以外に1×1間や1×2間の堀立柱建物跡、土器や石器を埋納した墓壙の可能性を持つ土坑など、その種類も多様化している。時期の細分作業は未着手であるが、現段階での所見では時期を経るに従い、遺構の分布は徐々に台地東側に移行する傾向がある。集落形態も大きく一つの環状に見られるが、遺構分析が進めば複数形態に分かれる可能性もある。



第25図 長峯遺跡の遺構分布 ※平成11・12年調査の航空写真を合成処理している。
 ☆印はヒスイ製垂飾り出土の墓墳集中地点を示す。



第26図 容器を抱える土偶



	遺構名	長さcm	最大幅cm	厚さcm	重量g
1	SK1481	3.0	2.0	0.9	8.8
2	SK2370	5.9	2.7	1.7	53.7
3	SK2025	5.8	3.4	2.0	65.9
4	SK2618	9.9	3.6	1.7	122.7

第27図 ヒスイ製垂飾り

なお特殊な遺物として、住居跡の覆土上層より、腹部が容器と一体化し、それを両手で抱えるような形態の土偶が出土している。頭・腕・下半身が欠損し、現存高13.5cmを計る（第26図）。

中期後葉 この時期になると遺構分布は大きく変容する。中葉までの分布範囲と重なりつつ、全体に台地東側の上流部分に偏り、そこに非常に明瞭な環状集落が形成される。中央には径10m程の円形をした遺構の無い範囲（広場）が設けられ、その周囲を取り囲むように楕円形や長方形をした墓壇が幾十も分布している。墓壇のうち、4基からヒスイ製垂飾り（第27図）が見つかり、特に大形の3点（第27図2～4）が出土した3基の墓壇は非常に狭い範囲にまとまる特徴がある（第25図☆印）。また広場と墓壇域の境界上面には扁平な自然礫がほぼ同心円に並べられている。墓壇の外周には無数の土坑が密集し、そこに1×2間の6本柱の掘立柱建物跡も十棟程が配置されている。住居跡は土坑群の外側から台地の縁辺まで複雑に重なり合っている。また台地縁辺にある住居跡の一部は斜面の崩落のために壊れていることから、縄文時代の台地は今より幅が広く、谷への傾斜も緩やかであったことがわかる。そして集落も調査範囲以上に大きく展開していた可能性がある。環状集落から離れた、遺跡西側の台地の南縁辺には同時期の径1～2mある大形の貯蔵穴が並ぶ。この群列は隣接する聖石遺跡までつながる。

中期終末～後期初頭 台地東側の縁辺に数軒の住居跡と貯蔵穴が分布する。そのうち3軒は敷石住居跡であることが確認されている。遺構分布は中期後葉の集落内に収まるが、敷石住居跡が中期の墓壇群を壊していることや、分布域が東縁辺に偏ることから、環状集落とはやや形態が異なる印象を持つ。

後期前半 これまでの台地上を離れ、遺跡南西の南斜面に敷石住居跡、掘立柱建物跡（1×1間）、墓壇、貯蔵穴が分布する。今回の調査では小規模の分布にとどまっているが、本工事で盛土保存される南側の谷地形への確認調査では斜面下位に遺物の集中があり、より広範囲に集落を形成していたことが考えられる。同じ斜面の西側下流200mにある聖石遺跡、谷を隔てた南側の低い尾根に立地する別田沢遺跡（第23図）など、既存の遺跡範囲を超えた関連性を考える必要がある。

今後の作業 聖石遺跡、長峯遺跡ともに本格的な整理作業はこれから始まる。発掘調査によって得られた成果を踏まえ、膨大な遺構と遺物の正確な資料化に努めたい。そこから標高1,000mの台地に生活した縄文時代の人々の暮らしぶりが明らかになるだろう。

8 ^{うますてば}馬捨場遺跡（広域農道改良事業関連）

所在地：茅野市泉野5729番地他

調査担当者：河西克造、白居直之、宇賀神誠司

調査期間：平成12年5月8日～8月25日

調査表面積：8,500㎡（実質面積10,500㎡）

遺跡の立地：八ヶ岳の裾野、柳川以南の段丘上～段丘端部

出土遺物

検出遺構（平成12年1月現在）

土器：縄文時代中期土器

石器：ナイフ形石器、槍先形尖頭器、スクレイパー、石核（旧石器時代）、石鏃、石匙、打製石斧、石皿（縄文時代）

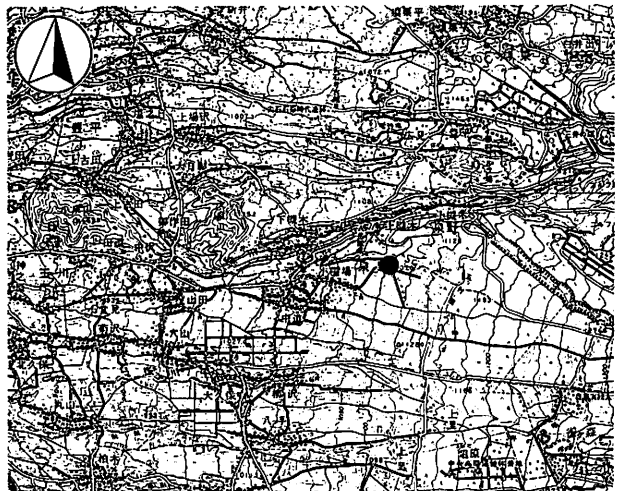
銭貨：文久永寶

遺構名	数	備考
ブロック	10	旧石器時代
竪穴住居跡	8	縄文中期初頭6、中期後半1、中期1
陥し穴	30	縄文25、中世(?)5
土坑	280	縄文中期。貯蔵穴、集石土坑を含む
溝	1	近代

馬捨場遺跡は、八ヶ岳から流れる柳川以南の段丘上に立地する。この八ヶ岳の裾野は近年の圃場整備により平坦となっているが、本遺跡（①・②区）と周辺遺跡の発掘調査で八ヶ岳の押し出しと考えられる厚い礫層が堆積する谷が確認されている。段丘上は狭小な尾根と谷が連続する複雑な地形であったと考えられる。調査対象地の一角は、近代まで地元小屋場の農耕馬の埋葬地として利用されており、遺跡名の由来となっている。今回の調査では谷部付近を除き調査区全域で遺構が確認され、旧石器時代、縄文時代、中世以降の3時期のものが認められた。

縄文時代の遺構では竪穴住居跡、土坑などがあり、出土土器から大半が中期初頭の所産と考えられる。竪穴住居跡は農道が通る尾根頂部付近に位置し、①区（SB01、02、03）、②区（SB04、05）とも数軒が4～7m間隔で近接しており、住居周囲には断面がフラスコ形を呈する所謂「貯蔵穴」が密集する傾向があった。この状況から、尾根頂部の西側と北側の2箇所に住居域が分かれて存在する集落であったと考えられる。

底部に小ピットが付設された所謂「陥し穴」は40基確認され、尾根頂部から段丘端部に向かう配列が見られた。縄文時代に帰属すると思われる陥し穴は、平面プランと断面形状から数種類に分類が可能であるが、中期初頭の竪穴住居床下と中期初頭の土坑下部で見つかったものがあることから、中期初頭以前の年代を与えることができる。その一方で、長楕円形を呈し規模・形状ともに異質



第28図 馬捨場遺跡位置図（1：100,000）

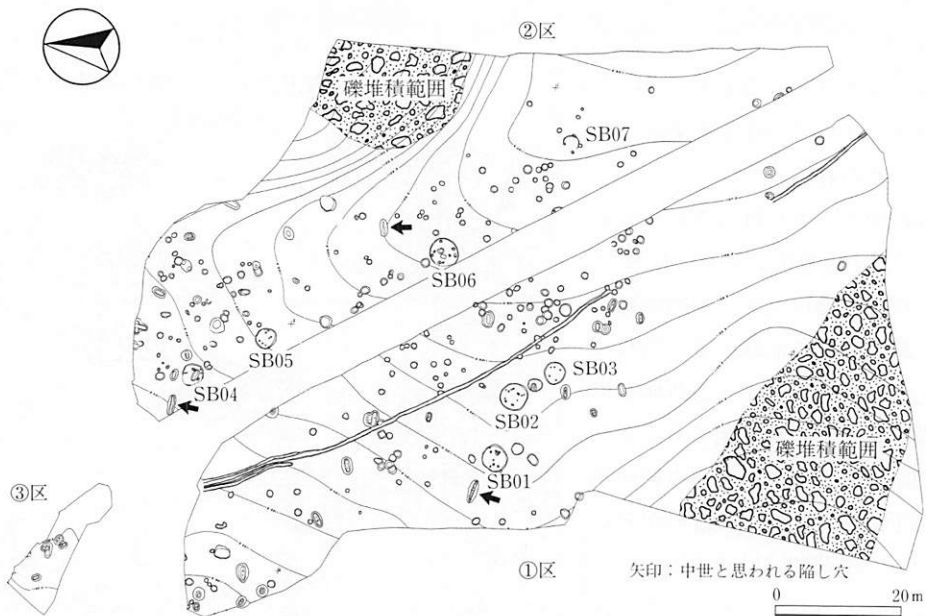
な陥し穴が確認された。この遺構には壁に金属と思われる工具跡が見られ、原村、南平遺跡でC14年代測定の結果、中世の陥し穴と判明したものに酷似している。かかる形状・規模の陥し穴は中世の所産の可能性が高く、八ヶ岳の裾野が中世の狩猟場であったことを考古学的に証明できる可能性がある。

調査成果として、ソフトローム層より出土した旧石器がある。出土したナイフ形石器、槍先形尖頭器、スクレイパー、石核、チップなど約800点の遺物は、段丘上の尾根が柳川に向けて傾斜する北斜面の肩部を中心に出土した。石器は散在的に分布する状況で、ブロックは北西斜面の肩部に並列する様相を示していた。石器群はナイフ形石器が終焉し槍先形尖頭器が増加する時期のものと考えられる。

今回の調査では、段丘端部に近い③区でも縄文時代の遺構・遺物が見つかり、遺跡は段丘端部まで広がっていることが確認された。来年度、段丘端部を調査する予定であり、今年度の成果とあわせて馬捨場遺跡の内容がより明らかにされると思われる。



第29図 旧石器の調査風景



第30図 馬捨場遺跡 縄文時代以降の遺構配置図 (1 : 1,200)

9 ^{みのわ} 箕輪遺跡 (国道153号伊那市～箕輪町・伊那バイパス関連)

所在地：上伊那郡箕輪町三日町
 調査担当者：白居直之・市川隆之・上田真
 河西克造・桜井秀雄

調査面積：13,000㎡

延べ面積：14,500㎡

調査期間：平成12年10月10日～平成13年1
 月26日 (平成13年2月26日～2
 月28日)

遺跡の立地：天竜川と西山山麓からの河川に
 より形成された複合扇状地。

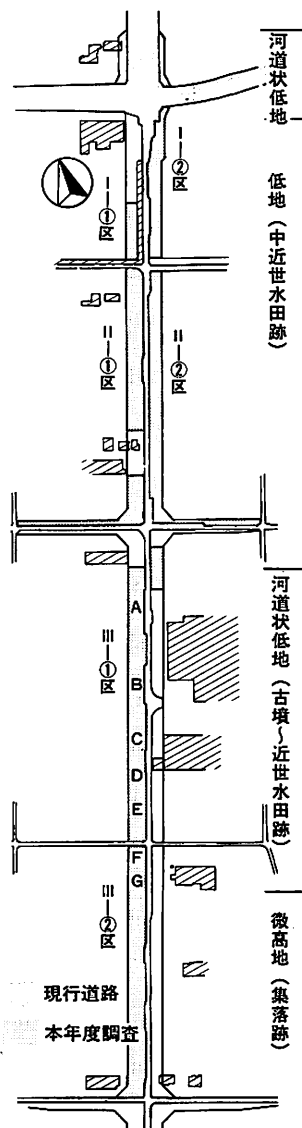
主要検出遺構：・ 竪穴住居跡29軒 ・ 掘立柱建
 物跡7棟 ・ 平地式住居跡2棟
 ・ 土坑20基 ・ 溝跡34条 ・ 水
 田跡〔近世9地点、古代2地点、
 古墳6地点〕 杭列畦畔9条



第31図 箕輪遺跡の位置 (1:100,000)

第32図 調査区地形図及び本年度調査範囲

(1:6,000)



主要出土遺物

土器：縄文時代晩期、弥生時代中期～後期、古墳時代前期、古墳時代後期～平安時代前半の土師器・須恵器、中近世陶磁器 石器：太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、打製石斧、打製・磨製石鏃、砥石、磨り石、各種未製品 石製品：碧玉製管玉、滑石製模造品 土製品：土玉、ミニチュア容器 木製品：大形槽、田下駄、建築部材、杭 金属製品：ヤリガンナ、銅銭



第33図 杭列畦畔 (SA103) 検出状況 (Ⅱ-①区)

調査の概要：本遺跡は昭和25・26年に実施された大規模な土地改良工事によってその存在が確認され、県内では低湿地立地の遺跡として早くから注目されていた。遺跡範囲は箕輪町から南箕輪村にまたがる総面積約100ha以上と捉えられている。

本年度の調査は、三日町地籍内の道路用地約20,000㎡を対象として行われた2カ年計画の1カ年目の調査である。調査区は、ほぼ南北に走行する現行道路に沿って両側幅約20mを全長800mにわたって設定された。この調査地点は、西側山麓から発達した扇状地の扇端にあたり、中小河川が天竜川に注ぎ込む場所に位置する。このため重機による表土掘削において砂礫層の起伏が繰り返し検出され、中小旧河道による低地と微高地が複雑に入り組んだ状況が確認された。



第34図 A低地近世耕作遺構 (Ⅲ-①区)

遺構の分布状況は旧地形に付随して、調査区北側 (Ⅰ・Ⅱ区) の低地、中央域 (Ⅲ-①区) の河道状低地、南端域 (Ⅲ-②区) の微高地に3区分され、低地からは主として近世水田跡、河道状低地からは古墳時代から近世にわたる水田跡、微高地からは弥生時代中・後期、古墳時代の集落がそれぞれ検出された。

(1) 北側低地域 (Ⅰ・Ⅱ区)

調査区北端からは弥生後期に

遡る河道が2条、弥生終末期の竪穴住居跡が1軒検出された。このほかは、ほぼ全域で中近世の水田土壌を確認した。水田面は酸化鉄の集積状況等で検出を試みたが部分的に認識される程度であり、畦畔となる杭列は7条検出されたが、盛り土は後世の耕作により不明確であった。ただし杭列は2条を1単位として走行する特徴が捉えられ、杭出土の検出面に違いが認められることから数回補強が行われていた可能性が指摘された。本調査区で確認された杭列畦畔は、従来の調査と合わせて箕輪遺跡全体で検討していきたい。

(2) 河道状低地域〔Ⅲ-①区〕

中央部の河道状低地はA～Gの7地点で確認された。本低地は砂礫層の高低により各地点で状況異なるが、古墳・平安・中近世の小規模な水田跡と認識された。最下層の水田土壌は暗緑灰色シルトで、6地点において耕作時の痕跡と思われる凹凸が検出された。この土壌からなる水田は、E低地の耕作土内から出土した土器が古墳中期であったことから古墳水田として捉えた。水田区画となる畦畔状の高まりはA・E・Gの3低地で認められ、一辺2～5mの不整形の水田が部分的に検出された。またE低地南端には、溝跡と横木・杭を芯材とする大畦畔があり、大形槽や建築材が利用されていた。平安水田跡はA・C・E低地で畦畔状の高まりと大小の円礫が列状に並ぶ痕跡から水田区画を捉えた。区画は地形に沿った不整形となり、畦畔付近から平安前半期の杯が出土した。近世水田跡で特筆する遺構は、A低地で砂礫層に被覆された小畦畔32条である。畦畔は南北に約1.5m間隔で西南西から東北東方向へ平行して走行し、北側には杭列を芯材とする大畦畔が確認された。耕作面には部分的な凹凸が確認されたが、整然とした砂礫層の堆積状況と南北方向の畦畔が2条と少ないことから水田遺構とするかは今後検討したい。

(3) 集落域〔Ⅲ-②区〕

集落域は、調査区南端約1,500㎡の範囲に検出された。出土遺物で最も古い時期は、縄文時代晩期の土器数片で、天竜川の河道を含めた本調査区の地形形成が該期に遡ることが示唆された。遺構としては、弥生時代中期後半・後期中葉、古墳時代後期前半の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、古墳時代前期の廃棄土坑などが検出され、弥生中期から古墳後期まで断続的に集落が存在する状況が確認された。

弥生中期の竪穴住居跡は10軒確認され、住居内からは千曲川流域に分布の中心がある栗林式土器や磨製石器類が多量に出土した。磨製石器のなかでも太形蛤刃石斧は善光寺平に産出する



第35図 弥生中期竪穴住居跡 (SB22) 遺物出土状況

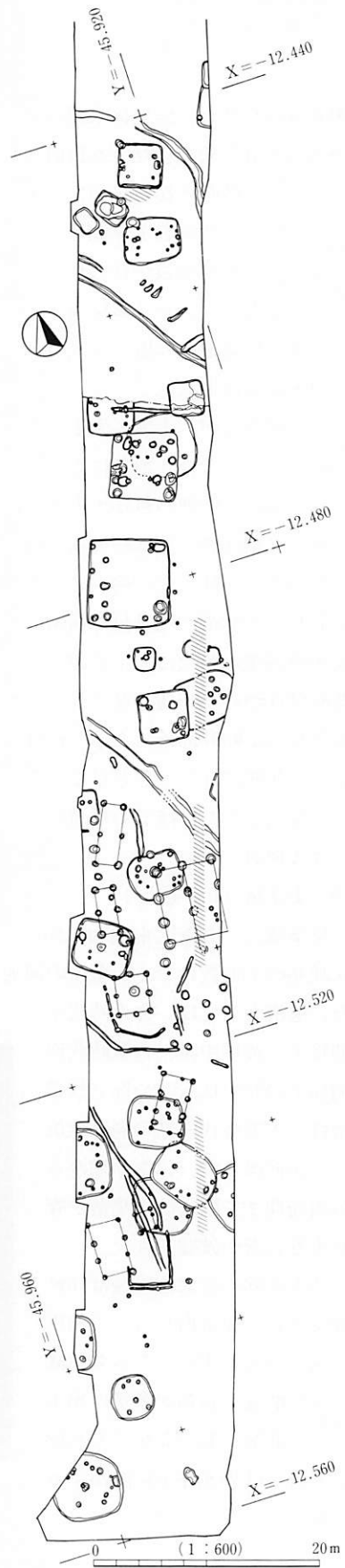
石材で、扁平片刃石斧類は本地域産出の石質であった。また石鏃も多数出土し打製と磨製の両者が存在し、7 cm以上の長さを有する大型品が目される。住居内からは大小の砥石や黒曜石の石核などが共伴していることから、本遺跡で石器製作が行われていたことが窺われる。弥生中期の集落は上伊那地方では初となる遺構群で、土器様相や石器組成の上で重要な資料となるであろう。

弥生後期は竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡数棟などが検出された。住居構造は、柱穴埋土が微妙であり不明確な点もあったが、本地域特有の石囲い埋甕炉を数軒で確認した。また直径約6 mの周溝と溝内に柱穴が並ぶ平地式住居が検出され、集落構造を解明する上で注目される。該期の出土遺物は比較的少なかったものの器形がわかる一括土器資料が得られた。

古墳後期の遺構は、検出面から浅く、カマド等の住居構造が十分に把握されなかったが、竪穴住居跡8軒と掘立柱建物跡6棟などが確認された。一辺7.5 mの大形住居や大形掘立柱建物跡が存在し、本調査地点が集落の中心的役割を担っていたことが指摘される。また住居内からは滑石製模造品類と白玉が数点出土した。



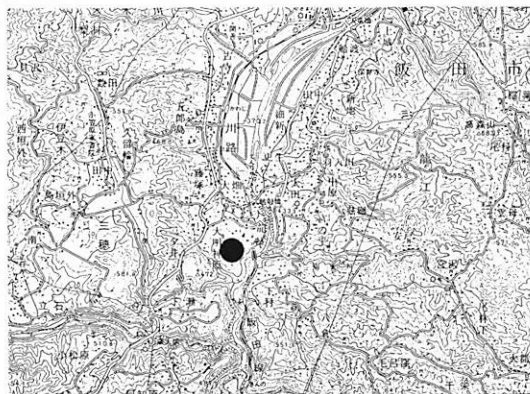
第36図 集落域全景（南より）



第37図 微高地集落域全体図

かわじ だいまようじんばら
10 川路大明神原遺跡（一般国道474号飯橋道路・三遠南信自動車道関連）

所在地：飯田市川路5435ほか
調査担当者：若林卓 西嶋力 青木一男
調査面積：25,940㎡
調査期間：平成12年4月17日～12月23日
遺跡の立地：天竜川西岸の河岸段丘
遺跡の特徴：縄文時代中期の集落
検出遺構：竪穴住居跡30(27)、土坑640
(480) ()内は本年度分
出土遺物：縄文土器・石器



第38図 川路大明神原遺跡の位置（1：100,000）

調査の概要：川路大明神原遺跡は、飯田市南部の天竜川に面した河岸段丘上に立地し、三遠南信自動車道の建設に伴って昨年度より当センターが発掘調査を実施している。

遺跡内の地形は中央にある南北方向の谷を挟んで東西で異なる。東側は台地状の地形を成しており、天竜川に近い東端部が最も高く、南と西へ向かって緩やかに下っている。西側は川路丘陵山麓の扇状地で、東南に延びる尾根状微高地と谷状微低地から構成される。本年度の調査は、東側台地の北部を対象に確認調査と面的調査を行い、また、西側扇状地南部の微高地において確認調査を実施した。

検出された遺構は竪穴住居跡、土坑、集石炉がある。

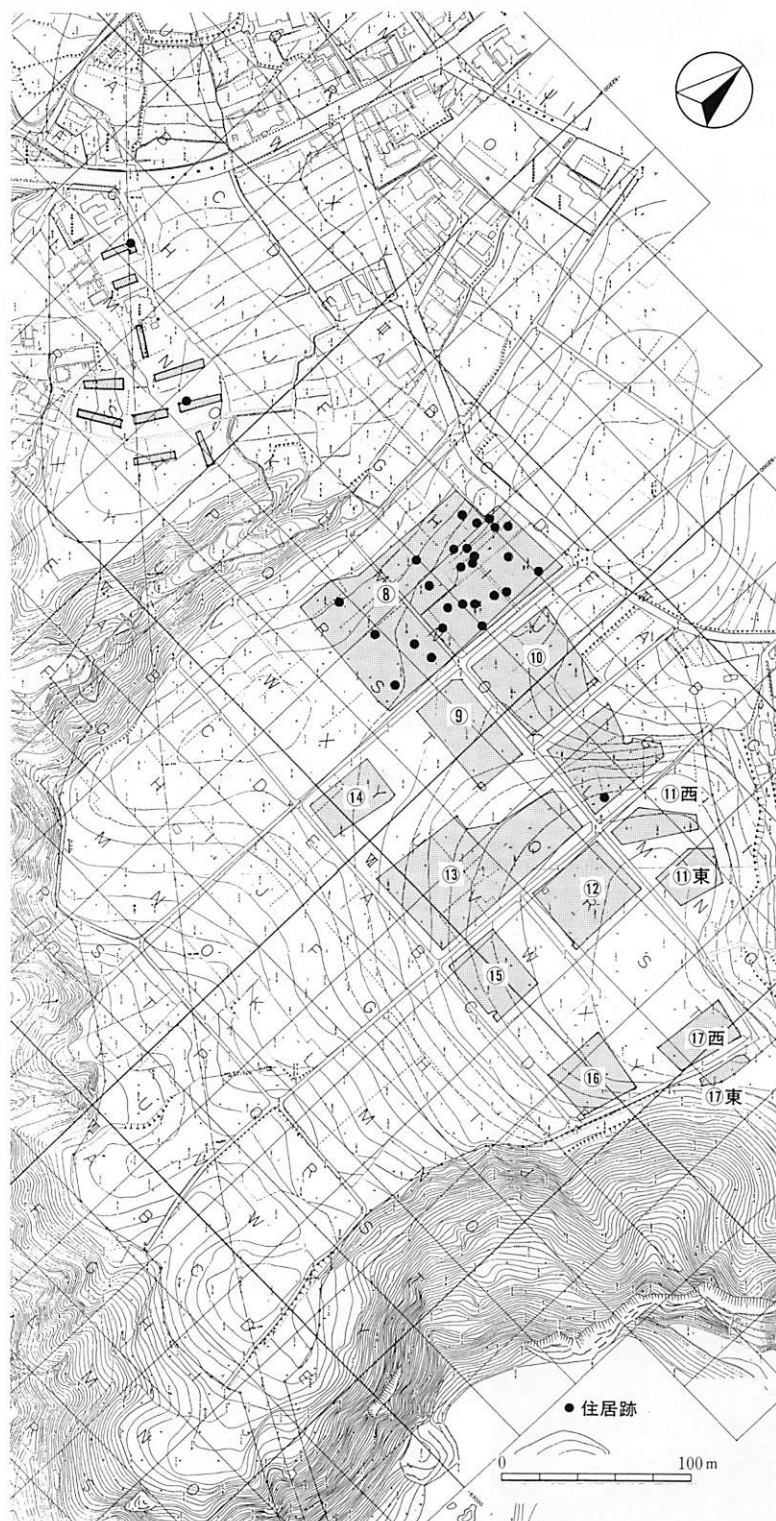
竪穴住居は⑧区で26軒、⑬区東南隅で1軒が検出された。⑧区の竪穴住居は台地頂部の平坦地に近接して営まれているが、とくにその北半部に集中し、幾つかのまとまりをもって分布する様相をみせている。平面形状は円形ないし略円形が主流で、隅丸方形に近い形態や楕円形が少数ある。炉は床面中央と壁の中間あたりの位置に築かれ、土器埋設炉と小形の礫を用いた石

囲炉が認められるが、後者の割合が圧倒的に多い。また、前者から後者への造り替えがなされた例もある。壁下に周溝を廻らせる住居は6軒確認され、うち4軒が石囲炉をもつ。出土遺物から竪穴住居の時期は縄文時代中期中葉から後葉と考えられる。

土坑は陥し穴のほか、円形土坑がある。陥し穴はすべての調査区において検出された。台地頂部の平坦地を中心に分布し、⑧区では一部集落域と重なる。天竜川の崖際の⑯・⑰区では検出



第39図 ⑧区調査状況



第40図 調査範囲 (1 : 40,000)

土坑の多くが陥し穴である。平面形は楕円形・長方形で、壁は下部が垂直に立上がり上部が漏斗状に開く場合が多く、底面に小ピットをもつものもたないものがある。底ピットの形態は1穴、2穴、複数の細い杭痕状、の三類型が認められる。遺物は殆どないが、円形土坑を切る例、切られる例ともにある。

円形土坑も殆どの調査区で検出した。台地頂部平坦地に主に分布し、斜面には少ない。⑧区においては住居の近隣に単独ないし2～3基がまとまって群在する傾向をみせる。楕円形に近い形状もあるが、直径1～1.5m前後で、底面は平坦、壁はほぼ垂直で袋状を呈する場合も多い。形状から貯蔵穴である可能性が高いと思われる。また、底と壁の一部が二段掘り状(横穴状)を呈するものがある。遺物の出土は比較的多く、分布状況を考え併せ、竪穴住居とはほぼ同時期のものとする。

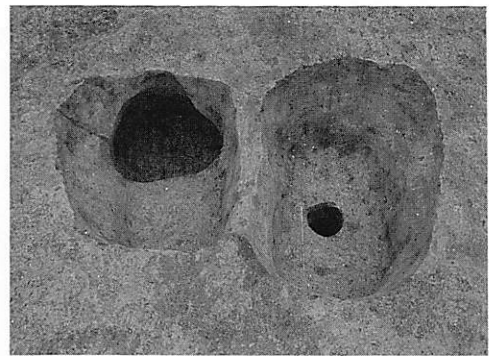
集石炉は⑧区南部で1基検出された。内部に拳大の焼礫と炭化物が多量に入っている。遺物は出土しなかった。

出土遺物は未整理であるが、土器には在地系のほか東海系、加曾利E系などの他地域系の土器がみられる。石器は打製石斧・横刃形石器・石錘の多さが目立ち、石鏃・石匙等の小形剥片石器類や石皿・磨石は多くない。

今回の調査で、東側台地の西縁部に、縄文中期中葉から後葉の集落が展開することが明らかになった。台地中央から東縁部では住居は1軒検出されたただけであるが、円形土坑の分布状況からすれば、集落跡が存在する可能性はある。未調査地が広く残っているので、来年度以降の調査により遺跡内容はさらに明らかになるであろう。なお、西側扇状地部の確認調査では方形プランと思われる竪穴住居跡2軒と土坑および焼土址数基が検出された。この部分については来年度に面的調査を行う予定である。



第41図 竪穴住居跡 (SB18)



第42図 二段掘り状土坑と陥し穴

11 ^{たけさ なかはら} 竹佐中原遺跡 (一般国道474号飯喬道路・三遠南信自動車道関連)

所在地：飯田市竹佐中原

調査担当者：青木一男

調査面積：4,860㎡

調査期間：平成12年11月30日～12月8日

遺跡の立地：馬の背状台地の北東斜面

検出遺構：土坑8基

(縄文時代、内1基は陥し穴)

出土遺物：縄文土器片・打製石斧各1点

調査の概要：竹佐中原遺跡は石子原遺跡の

南東500mに位置する。石子原遺跡の台地とは、開析する谷を隔てて近接した台地である。当遺跡は、馬の背状台地の北東斜面に展開する。台地上はロームが厚く堆積し、縄文時代の土坑が散在するが、その数は非常に少ない。斜面部では表土下に礫が混入する割合が高く、遺構が殆ど検出されなかった。本年度の調査地域は、遺構とともに遺物の出土量も非常に限られており、集落域の周辺エリアであったと想定される。



第43図 竹佐中原遺跡の位置 (1 : 100,000)

12 石^{いし}子^こ原^{ばら}遺跡（一般国道474号飯番道路（三遠南信自動車道）建設事業関連）

遺跡所在地：飯田市山本南平地籍ほか

調査担当者：大竹憲昭 上田 真

調査面積：15,000㎡

調査期間：平成12年5月15日

～同年10月20日

遺跡の立地：古扇状地が浸食される過程で残った馬の背状の丘陵

遺跡の特徴：旧石器～古墳時代の複合遺跡

主な検出遺構

古墳時代：竪穴住居跡1、古墳周溝1

弥生時代：方形周溝墓4

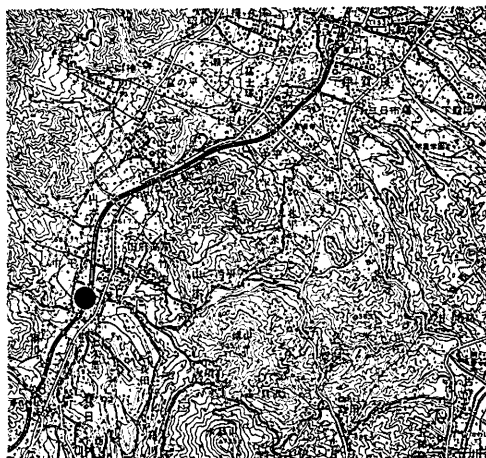
縄文時代：竪穴住居跡6、土坑50、集石2

主な出土遺物

土器：土師器・須恵器・弥生土器・縄文早期押型文土器など

石器：石鏃・楔形石器・スクレイパー・磨石など（縄文時代）

ナイフ形石器・2次加工のある剥片など（旧石器時代）



第44図 石子原遺跡位置図（1：100,000）

遺跡の概要と調査の経緯

石子原遺跡は、飯田市の南西部山本地籍に位置する。西方には標高1397mの高鳥屋山（たかとやさん）があり、遺跡はその山麓部に発達した扇状地にあたる。遺跡のある小丘陵は、この地域で一番古く形成された扇状地で、その後の浸食により、東西800m南北250mの東西に長い馬の背状の台地が形成された。標高は630mを測る。また、石子原の丘陵は古期扇状地の中でも最高位をしめているため、久米川水系と阿智川水系との分水嶺をなしている。

遺跡は、今から28年前の1972年（昭和47年）の中央自動車道建設に先立つ発掘調査で、旧石器時代（約3万年前以前）～古墳時代（約1500年前）にわたる複合遺跡であることが明らかになった。その時に発見された旧石器はいわゆる「前期旧石器時代」に位置付けられ、長野県内で最も古い遺跡として著名となった。今回の調査範囲は、前回の調査区に隣接するため、旧石器の検出が期待されたとともに、前回、中央道用地外に延び、完掘できなかった石子原古墳の周溝や方形周溝墓の続きが検出されることが調査前からわかっていた。

第45図に本年度調査範囲を示した。調査区は、地形により台地上と低地部に分けられる。台地上の第1調査区は、試掘トレンチを入れた後、本調査に入り、上記の遺構・遺物を調査した。中央道本線寄りのほうが遺物・遺構の密度が高くなる（第46図）。低地部にあたる第2・3調査区は、試掘トレンチを入れたが、遺物包含層は検出されず、土壌サンプル採取、土層断面の観察・記録をして調査終了した。なお、第1調査区の一部は用地未買収のため調査は次年度以降に行うことにした（アミのかかっている部分）。

遺跡の層序

遺跡の基本層序は以下のようである。

第1層：表土、層厚は平均30～40cm。第2層：旧表土、古墳周溝内および墳丘内にもみられる黒色土。第3層：褐色土。縄文早期押型文土器や石器を包含する。第4層：茶褐色～暗黄褐色ローム層。本来の旧石器包含層と考えられる。台地上の地点によっては第3層との判別が困難である。第5層：黄褐色ローム層。上部で1点だけ石器が検出された。以下、無

遺物層となる。台地北側では、本層の最下底部に御岳第Ⅰ軽石層と考えられる軽石がブロック状に検出された。第6層：赤色風化帯をもつ土壌。第7層：赤色風化帯をもつ砂礫層。第8層：扇状地礫層。石子原遺跡のローム層（赤土）は、台地上に降り積もった純粋な降下火山灰層そのものではなく、周辺に降った火山灰が雨や風によってもたらされた再堆積層で形成されているというのが地質学からの所見である。したがって、地層による石器の年代決定は難しい。

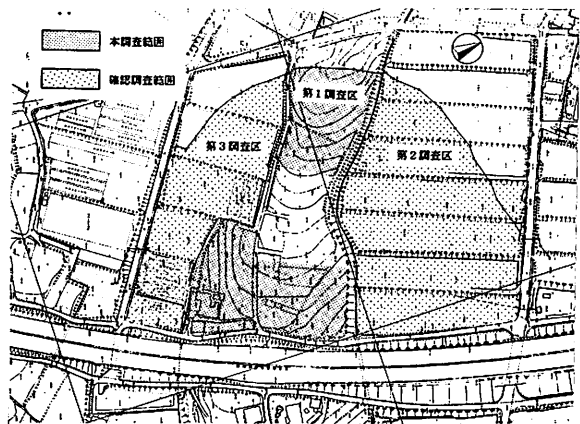
調査結果の概要

古墳時代：古墳周溝1基と竪穴住居跡1軒を調査した。28年前の調査では、石子原古墳という円墳を1基調査しているが、今回はその周溝の残り部分を調査した。竪穴住居跡は1軒だけ単独検出された。

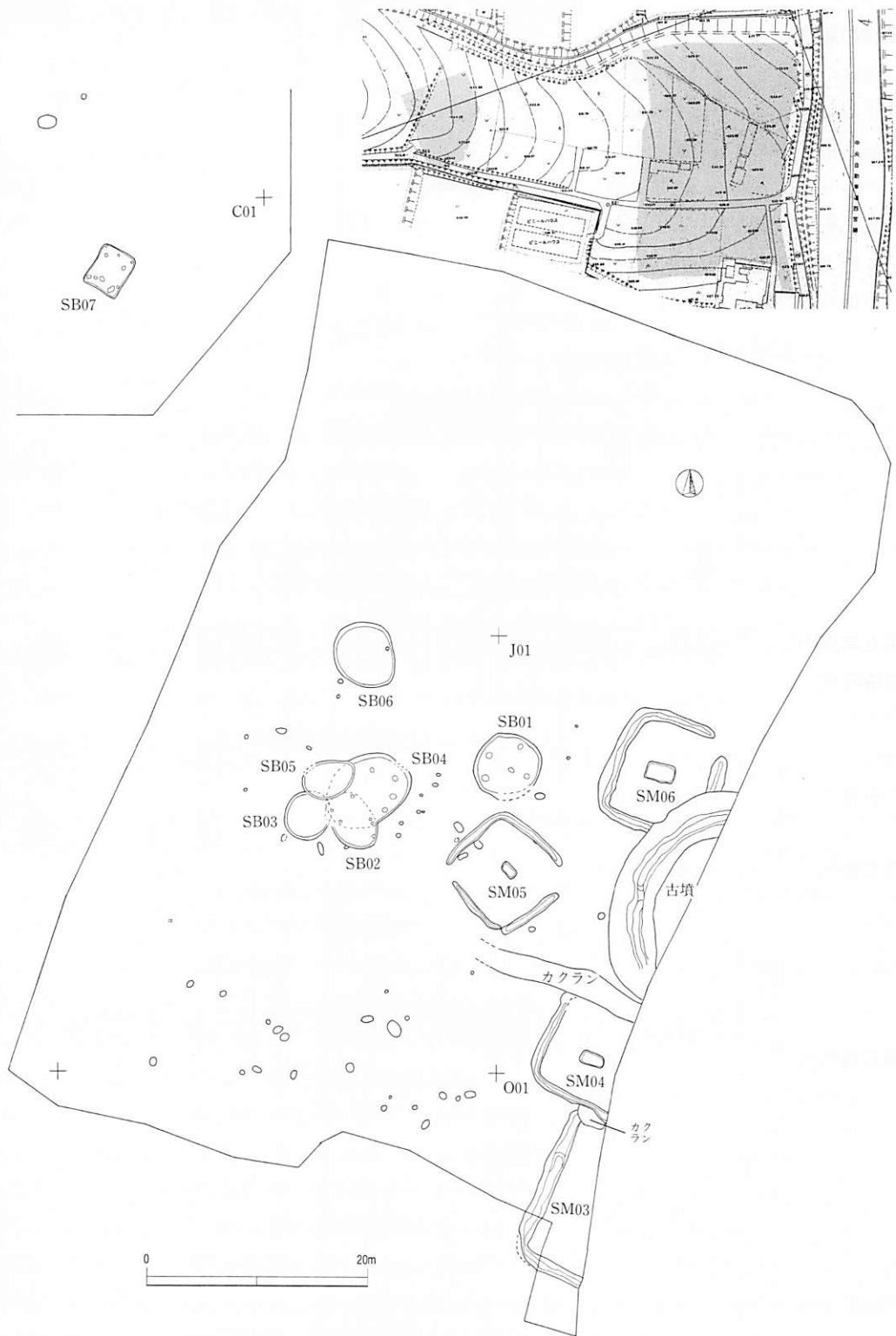
弥生時代：方形周溝墓4基を調査した。うち1基は、主体部の残存状況が良好で、棺の大きさや埋葬方法を知る上で好資料といえる。

縄文時代：早期押型文期の好資料が得られた。発見された遺構は、竪穴住居跡が6軒と同時期と考えられる焼土跡・土坑が約50基であった。押型文期は、竪穴住居跡で構成されるムラの出現期にあたるが、まだまだ事例が少ない。住居規模の大小、炉や柱穴等の住居内施設の有無などバラエティーが多く、今後整理作業を進めていけば、出現期のムラようすが明らかになっていくと思われる。

旧石器時代：第3層下部～第4層にかけての遺物は約40点であった。深いものはローム層上面から約40cmを測り第5層に食い込むものもあったが、多くは、第4層上部から出土した。平面分布は大きく3群に分かれるが、それらの中には縄文期の遺物も確実に含まれており、現段階ですべてを旧石器の遺物とは言い切れない。前回（昭和47年調査）出土の旧石器と比べると、遺物が出土しはじめる層準は同じだが、前回の方がより深くまで出土が続く。今回の石器群の特徴は前回の石器群と一部共通する点もあるが、後期旧石器時代に特徴的なナイフ形石器がみられることから、時期的には後続する石器群をも含んでいるとまとめられる。つまり、石子原遺跡の旧石器は、前期旧石器（中期旧石器）末からそれ以降の後期旧石器時代まで断続的に続いていた可能性が強くなった。



第45図 平成12年度の調査範囲



第46図 石子原遺跡 遺構配置図 (1 : 600)

担当者：川崎 保

経過 駒込遺跡は北佐久郡浅科村桑山に所在する縄文時代から中近世に至る複合遺跡で、平成10年度から11年度まで発掘調査が実施された。本年度は報告書刊行に向けた整理作業が行われ、平成13年2月に報告書が刊行される。

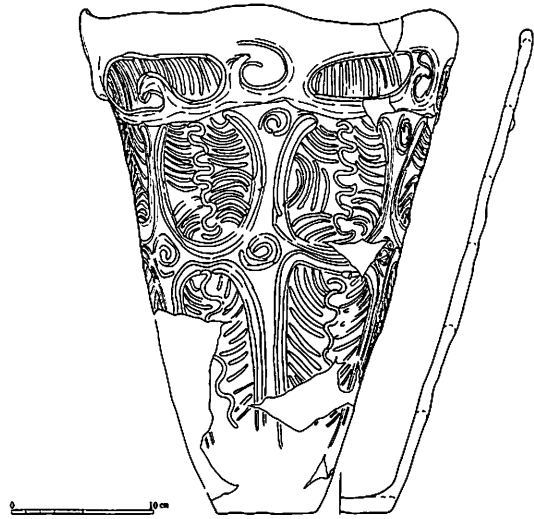
整理作業 縄文土器の接合をまず行ったが、想像以上に脆くそのまま従来どおりセメダインやハイスーパーなどの接着剤で接合しても、土器自体が破損してしまうので、樹脂含浸をして土器を強化する作業を行うこととした。

当初ボンコートを水に溶かして徐々に濃度を上げていく方法で一部の土器にボンコートによる硬化が行われたが、①土器に含浸するのに数日間かかる。②ボンコート水溶液に土器を入れておくと、土器内部の空気が土器の表面で気泡となり、そのままかたまってしまうことがあった。よって、復元室との相談の上、①含浸速度が5分以内と速い。②水に溶かす必要はなく、濃度を上げる必要がない。などの利点があるシーラーという樹脂を試用したところ、非常にスムーズに土器の硬化を行うことができた。シーラーもボンコート同様にそのまま放置すると表面が光ってしまうが、液から出したあと流水中で表面をすすげば、てかりを防ぐことができる。また、シーラーは硬化すると、有機溶剤にもほとんど溶けることがなく、接着剤はシーラーで覆られると剥がすのは非常に難しい。よって含浸前に接着剤で接合するのは避けたほうがよい。

このほか土器接合復元、遺物実測、遺構図作成、トレース、写真撮影、図版組み、原稿執筆などを行った。

成果 詳細は本報告書を参照されたい。遺構の主体は古代や中世が大半を占めた。とくに目立った遺物はなかったが、竪穴住居跡に伴い中央部が堅くしまっている円形の焼土集中が2箇所（竪穴住居跡SB13のSF1とSF2）認められる。これに対応するように鉄滓系遺物や焼けて変形した土器なども採集されていて興味深い。製鉄関連施設であろうか。

また、遺構外ではあるが、縄文時代中期後葉の土器、石器がまとまって出土している。佐久系土器もしくは鱗状短沈線文土器などと呼称されている資料（第47図）が過半をしめるが、加曾利E式系土器も見られる。



第47図 駒込遺跡出土縄文土器（1：8）

14 ^{こうさかやま}香坂山遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書29・整理作業）

担当者：谷 和隆

経過と本年度の作業 香坂山遺跡は佐久市大字香坂山地籍に所在し、ガラス質黒色安山岩の産地である八風山の中腹に位置する。平成9年に調査が行われたが本年度まで整理作業は行われなかった。

本年度は遺物の実測・トレース、遺構のトレース他、報告書刊行にいたるまでのすべての整理作業が行われた。

遺跡の概要 始良丹沢火山灰（以下AT）下層から出土した石器390点と礫28点は、新たに認定された6ヶ所のブロックに分布する。器種組成は貝殻状刃器18点、石刃10点、鋸歯縁状削器3点、厚刃搔器4点、揉錐器1点、2次加工のある剥片3点、剥片226点、碎片113点、石核11点、礫器1点となった。これらの石器は貝殻状刃器を主体として縦長剥片を持たない第1～4号ブロックと、縦長剥片持つ第5号ブロックに分けられる。両者の層位的な差異は認められないが、器種組成および剥片剥離技術は大きく異なるため、層位に現れない時間差や遺跡を残した人間の差が現れているものと思われる。

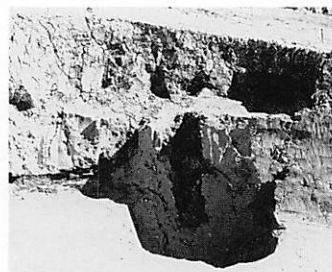
遺跡は旧石器時代の主要石材の1種であるガラス質黒色安山岩の産地に位置しているが、石器文化の内容はごく一般的なもので、特に原産地遺跡的な様相は見られない。

15 ^{さきはらうえ}笹原上第1・第2遺跡（県営蓼科ダム関連発掘調査報告書・整理作業）

担当者：宇賀神誠司

茅野市豊平に所在し、北八ヶ岳連峰の西麓、標高1,200mから1,250mの緩斜面に位置している。平成8年度に調査を実施し多数の陥し穴を確認することとなり、同9年度に図版作成および原稿執筆以外の整理作業が終了している。一部未買収地が存在し、その他架設ヤードの調査も行う必要があるのだが、依然として本体部分の用地買収が進行せず、現段階での報告書作成を念頭に置き、本年度は版下の作成および原稿執筆を行った。

陥し穴については、すでに貼壁の可能性を指摘してきたが（『年報』13・『年報』14）、現段階ではさらに逆茂木痕の形態にも注意をはらい、「埋め込む」存在と「打ち込む」存在に分類し、これに平面形態と貼壁の存在を重ね合わせて時代差を表徴しようという考えに至っている。狩猟形態の一端をどこまで判断可能かわからないが、一応の分類形態を示して今後の発掘のひとつの課題になればと考えている。



第48図 ふたとおりの逆茂木痕

II 普及・公開活動の概要

1 現地説明会

今年度の現地説明会は、発掘調査が実施された12遺跡中6遺跡で7回行われた。信濃町仲町遺跡（C地点）では7月22日（日）に、同遺跡を隣り合わせて調査している信濃町教育委員会と合同で実施し、旧石器時代から縄文時代草創期の遺物を中心に公開した。地元の方々を中心に80名ほどの見学者が集まった。

大町市山の神遺跡では7月30日（日）に、建設省国営アルプスあづみの公園工事事務所の主催で、長野県埋蔵文化財センター・長野県教育委員会・大町市の協力によって、発掘調査体験会が実施された。一般公募の4年生以上の親子15組の30人が発掘調査や土器洗いなどを体験した。

飯田市石子原遺跡では8月27日（日）に実施し、旧石器時代から古墳時代の遺構・遺物を公開した。下伊那地域の方々を中心に200名以上の見学者が集まる結果となった。当地域の遺跡への関心度を示す現地説明会となった。

信濃町仲町遺跡（B地点）では9月15日（日）に実施し、旧石器時代と平安時代の遺構・遺物を公開した。またあわせて昨年度調査の信濃町照月台遺跡にて発見された2万5千年前の希少な穴跡の剥ぎ取りレプリカも公開された。



第49図 信濃町仲町遺跡での町教育委員会との合同現地説明会

茅野市長峰遺跡では10月22日（日）に実施し、縄文時代中期や後期の遺構・遺物を公開した。昨年度に続き当遺跡での2度目の説明会となった。平成10年度まで調査された隣接する聖石遺跡と共に縄文時代を代表する遺跡とあって、300名以上の見学者が訪れた。

飯田市川路大明神原遺跡では10月29日（日）に実施し、縄文時代中期の遺構・遺物を公開した。昨年度に続き当遺跡での2度目の説明会となった。今年度はあいにく雨の中での説明会となったが、50名以上の熱心な見学者が訪れた。

箕輪町箕輪遺跡では12月22日（金）に実施し、弥生時代中期の遺構・遺物を中心に公開した。上伊那地域の方々を中心に150名以上の見学者が集まる結果となった。準備から実施まで短期間でのこととなったが、予想以上の見学者となり、遺跡を理解していただくよい機会となった。

2 展示会等

今年度も昨年度に引き続き県内市町村教育委員会の協力を得た企画展とし、開催地域も県内各地に拡大し、開催会場も公的な展示機関以外での実施も試みた。昨年同様、新たな見学者層や理解者層の開拓をも目指したものである。展示資料については、出土遺物、写真パネルなど、会場にあわせて資料を選択し、展示を行った。今年度の展示資料は以下の通りである。

[当センター保管資料]

信濃町：仲町遺跡、照月台遺跡、大田市：山の神遺跡、更埴市：屋代遺跡群、茅野市：長峯遺跡、聖石遺跡、馬捨場遺跡、箕輪町：箕輪遺跡、飯田市：川路大明神原遺跡、石子原遺跡、赤い土器の復元資料、整理作業風景パネル、当センターの紹介パネル

[市町村保管資料]

中野市：安源寺城跡遺跡、高山村：湯倉洞窟遺跡、長野市：綿内南条遺跡、大室古墳群、坂城町：青木下遺跡、穂高町：他谷遺跡、豊科町：山ノ上古窯跡遺跡、茅野市：梨ノ木遺跡、高森町：武陵地1号墳、飯田市：恒川遺跡群、上松町：吉野遺跡、大桑村：大野遺跡、万場遺跡

平安堂新長野店3階フリースペースを会場とした展示会を、7月16日（日）～7月27日（木）に実施した。展示パネルは19点である。長野駅前の買い物客などが多い会場で、これまでの固定的なファン以外の新たな見学者層の開拓を期待した。

木曾広域連合との共催による木曾文化公園内会議室を会場とした展示会を、12月9日（土）・12月10日（日）の2日間実施した。木曾街道400年祭りのイベントとして行われた。展示遺物は木曾郡内出土の土器や石器を中心に約180点を展示し、写真パネルは39点であった。2日間で250名以上の見学者が訪れた。見学者のほとんどが非常に熱心で、多い方は会場を5回も6回も繰り返し見学していた。会場は会議室を利用したものであったが、木曾郡内資料のみならず、県内資料を持ち込んだ試みに、見学者の多くから‘とてもよかった’との声をいただいた。

JR篠ノ井駅自由通路を会場とした展示会を、平成12年11月14日（火）～平成13年1月15日（月）に実施した。展示した写真パネルは12点である。篠ノ井駅自由通路を利用することによ

り、通行する方々に何げなく目に止めてもらい、少しでも多くのファンや理解者の開拓に期待した。

長野県庁1階ロビーを会場とした展示会を、1月29日（月）～2月9日（金）に実施した。展示遺物は13点、写真パネルは10点であった。行政関係者や一般県民の理解向上に期待した。長野県庁を訪れた多くの方々が関心を示していた。

長野県県民文化会館展示ホールを会場とした展示会を、2月1日（木）～2月12日（月）に実施した。展示遺物は200点、写真パネルは50点であった。平成10年度以来3年目となる今年度は、開催期間12日間で1167人ほどの見学者があった。

長野県立歴史館企画展示室を会場とした展示会を、3月17日（土）～5月13日（日）まで行っている。展示資料は当センター保管資料や県内市町村教育委員会保管資料を合わせて遺物約1200点、写真パネル約65点である。5月の連休明けの入館者も多く見込めることから、今年度は昨年度よりも1週間開催期間を延長した。また、県民に展示資料や県内出土資料を通しての歴史理解をより一層深めてもらう目的で、財団法人八十二文化財団のご協力を得て、4月22日（日）に講演会を行うこととなった。今回の講演会は下伊那地域で出土した‘富本銭’や‘和同開珎銀銭’を通して、古代信濃の歴史像を理解していただくことを目的とした。小林正春氏、栄原永遠男氏、松村恵司氏にご講演いただく。

昨年度は、3月18日（土）～5月7日（日）の開催で11611人の入館者であった。



第50図 木曾文化公園会議室での展示会

3 指導・研究会・学習会

期 日	講 師	指導内容
12/ 5 /26	信州大学・赤羽貞幸教授	山の神・菅ノ沢遺跡の地質・地形について
12/ 6 /21	元信州大学・河内晋平教授	長峯遺跡の地質・地形について
12/10/11	地質学者・松島信幸氏・寺平宏氏	石子原遺跡の地質について

4 刊行物

「県単農道整備事業大野田地区埋蔵文化財発掘調査報告書一駒込遺跡」

「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書29―香坂山遺跡」

「長野県埋蔵文化財センター年報17」

「長野県埋蔵文化財センター紀要9」

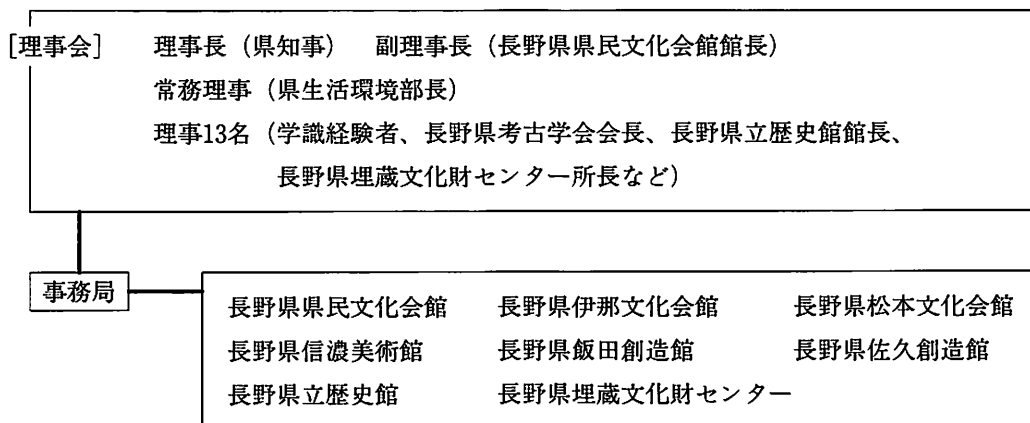
このほか当センターの内部情報紙として調査速報を4回発行した。

III 機構・事業の概要

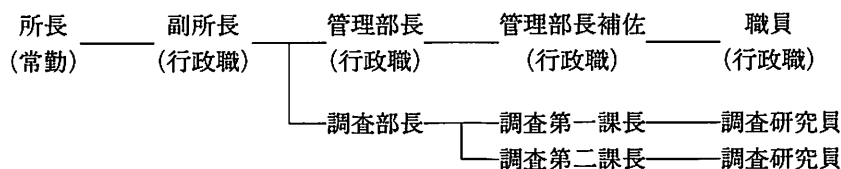
1 機構

(1) 組織

①助長野県文化振興事業団組織



②長野県埋蔵文化財センター組織図



(2) 所在地

更埴市屋代清水260-6

篠ノ井整理棟 長野市篠ノ井布施高田963-4

2 事業

(1) 調査事業

ア 調査遺跡

国営アルプスあづみの公園関係	大町市内 5 遺跡	建設省関東地方建設局の委託
国道18号野尻バイパス関係	信濃町内 2 遺跡	建設省関東地方建設局の委託
国道18号更埴坂城バイパス関係	更埴市内 1 遺跡	建設省関東地方建設局の委託
国道474号飯喬道路関係	飯田市内 3 遺跡	建設省中部地方建設局の委託
国道153号伊那バイパス関係	箕輪町内 1 遺跡	長野県土木部伊那建設事務所の委託
緊急地方道整備関係	坂城町内 1 遺跡	長野県土木部更埴建設事務所の委託

担い手育成基盤整備事業関係 茅野市内1遺跡 長野県諏訪地方事務所・茅野市の委託
 広域営農団地農道整備事業関係 茅野市内1遺跡 長野県諏訪地方事務所の委託
 畑地帯総合整備事業関係 南牧村内1遺跡 長野県佐久地方事務所の委託

イ 整理事業

上信越自動車道関係 佐久市内1遺跡 日本道路公団東京建設局の委託
 県単農道整備事業関係 浅科村内1遺跡 長野県佐久地方事務所の委託

ウ 保存処理事業

上松町、大桑村、飯田市、松本市、中野市の委託

エ 職員派遣

要請を受け、調査課職員を飯田市に1名、木曾広域連合に2名派遣。

(2) 事業費

上信越自動車道関係：30,150千円、国営アルプスあづみの公園関係：42,110千円、国道18号野尻バイパス関係：243,679千円、国道18号更埴・坂城バイパス関係：68,690千円、国道474号飯喬道路関係：152,433千円、国道153号伊那バイパス関係：82,968千円、緊急地方道整備関係：27,025千円、担い手育成基盤整備事業芹が沢地区関係：108,661千円、県単農道整備事業関係：2,730千円、広域営農団地農道整備事業関係：23,858千円、畑地帯総合整備事業関係：3,892千円、飯田市内・上松町内・大桑村内・中野市内・松本市内出土遺物保存処理事業：10,280千円

(3) 普及活動 (29ページ参照)

(4) 職員研修

ア 講師招聘および来所による指導・講習会等 (32ページ参照)

イ 奈良国立文化財研究所関係

期 日	日数	課 程	参加者
13/2/6～2/8	3	測量外注管理課程	柳沢 亮

ウ その他の学会関係研究会・研修会・講演会

期 日	発表者	内 容
12/6/11	川崎 保	「東アジアと縄文時代のシナノの装身具」上田国分寺資料館市民講座
12/8/29	鶴田典昭	「千曲川押羽流域水制発掘報告」小布施町高齢者学級
12/9/10	河西克造	「甲信越地方における織豊期城郭の礎石建物」織豊期城郭研究会
12/10/21	水沢教子	「縄文土器胎土分析研究の現状と課題」信州縄文文化研究会
12/11/26	青木一男 西山克己 土屋 積	「善光寺平の古墳時代」長野郷土史研究会
12/12/2	川崎 保	「縄文時代千曲川流域の打製石斧の石材」信州縄文文化研究会
13/2/3～4	百瀬長秀	「高井東式前後の中部高地」第14回縄文セミナー
13/2/11	柳澤 亮	「茅野市長峯遺跡」

	河西克造	「茅野市馬捨場遺跡」第13回諏訪地区遺跡発表会
期 日	参加者	内 容
12/11/16～17	西山克己	跨帯を巡る諸問題（奈良国立文化財研究所）
12/11/25～26	寺内隆夫	火炎土器様式圏の研究（新潟県立歴史博物館）
12/12/16	水沢教子	生産と利用に関する歴史資料分析研究（国立歴史民俗博物館）
13/2/23～25	土屋 積	東海考古学フォーラム
そのほか、各種学会・研究会・シンポジウムなどへの参加多数		

エ 県外博物館・埋文センター・遺跡等視察及び資料調査

期 日	視察・調査他	参加者
12/8/28～30	フォッサマグナミュージアム	水沢教子
12/9/9	岡山城跡	河西克造
12/9/13～15	奥三面遺跡群、十日町市立博物館等	寺内隆夫
12/11/20～22	熊本県大津町瀬田裏遺跡等	川崎保、桜井秀雄
13/2/28～	奈良国立文化財研究所、飛鳥史料館	西山克己
そのほか、各地の博物館・研究機関などの視察・調査など多数		

オ 全埋文協などへの参加

期 日	会議名	開催地	参加者
12/4/20	全埋文協中部北陸ブロック連絡会	長野市	佐久間鉄四郎以下5名
12/6/8～9	第20回全埋文協総会	浜松市	佐久間鉄四郎、長浦忠雄
12/10/5～6	全埋文協研修会	山口市	小林秀夫、宮島孝明、土屋積
12/10/5～6	全埋文協中部北陸ブロックコンピューター等研究委員会	名古屋市	谷和隆
12/10/12～13	全埋文協中部北陸ブロック連絡協議会	静岡市	百瀬長秀、青木雄一
12/11/16～17	関東甲信越静理蔵文化財担当者会	秩父市	町田勝則、大竹憲昭
13/1/23～24	埋蔵文化財担当職員等講習会	千葉市	柳沢亮

カ 県内市町村および関係機関への協力・指導等

期 日	市町村等	協力・指導内容	協力者
12/4/1～	国立歴史民俗博物館	基幹研究共同研究員	水沢教子
12/4/12～14	奈良国立文化財研究所	大月川岩層なだれの年代検討会	川崎保
12/8/31～	波田町	元寺場遺跡の発掘調査指導	市川隆之
12/7/21	長野市	史跡大室古墳群整備委員会	小林秀夫
12/9/18	戸隠村	根子屋城跡の調査について	河西克造
12/10/27～28	木曾広域連合	縄文時代前期末葉土器群の整理	上田典男
12/11/22	愛知県埋文センター	牛牧遺跡出土土器鑑定	百瀬長秀
12/11/24	中野市	高遠山古墳整備検討委員会	小林秀夫
12/12/12	木曾広域連合	縄文時代中期土器群の整理	寺内隆夫

キ 平成12年度市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会

—長野県教育委員会・長野県立歴史館と共催

1	日時	平成12年12月5日(火) 13時00分～16時00分		
2	会場	箕輪町箕輪遺跡		
3	内容	①沖積低地の発掘調査	百瀬長秀調査一課長	白居直之調査研究員
		②発掘調査現場での安全管理	小林秀夫調査部長	
4	参加者	53名		

ク 資料貸し出し

期間	遺跡	貸し出し資料	貸出先・目的
12/9/20～12/10	聖石	縄文土器・翡翠製品・土偶	横浜市歴史博物館企画展
12/9/1～11/30	屋代	木製形代など	上田市立国分寺資料館企画展
そのほか写真等の貸し出し多数			

ケ 同和研修

期日	研修名	会場	参加者
12/12/7	部落解放県民大会	長野県民文化会館	春日光雄

平成12年度役員及び職員

理事・所長	佐久間鉄四郎					
副所長	春日光雄					
管理部長	春日光雄（兼）		調査部長	小林秀夫		
管理部長補佐	宮島孝明					
職員	長浦忠雄（主任） 青木雄一（主事）					
調査課長	百瀬長秀 土屋積					
調査研究員	青木一男	市川桂子	市川隆之	伊藤友久	上田典男	上田 真
	宇賀神誠司	臼居直之	臼田広之	大竹憲昭	河西克造	川崎 保
	桜井秀雄	田中正治郎	谷 和隆	鶴田典昭	寺内隆夫	中島英子
	賛田 明	西 香子	西嶋 力	西山克巳	広田和穂	藤原直人
	町田勝則	水沢教子	柳沢 亮	若林 卓		
調査員	徳永哲秀 西嶋洋子		山崎まゆみ			

長野県埋蔵文化財センター年報17 2000

発行日 平成13年3月30日

編集発行 (財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007 更埴市屋代清水260-6
TEL 026-274-3891

印刷 信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野市西和田470
TEL 026-243-2105